

中国の詩人とトポフィリア —中国古典における陪都の文学

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国古典文学、とくに六朝時代の詩人・陶淵明（365～427）に萌芽が見え、その後、北宋時代の文人・司馬光（1019～1086）に至るまでの約600年間に徐々に典型化されていった中国文学の一特徴について、独自の視点で分析、考究したものである。

「ある特定の場所に対する情動」と解釈できるトポフィリアは、1970年代のアメリカにおいて発案され、提唱された近代地理学の一用語であるが、本論文はそれを中国の古典詩の理解にも応用できるのではないかとの仮説のもとに展開し、陶淵明にはじまり、彼とほぼ同時期の謝靈運（385～433）、そして沈約（441～513）、庾信（512～581）、また唐代に入って杜甫（712～770）、孟郊（751～814）、白居易（772～846）、韋莊（836?～910）など各時期の重要な詩人の生涯とその創作活動のありかたが体系的に考察されている。まず、かかる広範囲な中国古典詩の大作家の作品を渉猟し、その個々の作家の継承関係にも緻密な分析が及んだ本論文は、そのスケールとアプローチの方法において十分評価に値する力作である。

また、本論文の提出者は「トポフィリア」という考察の視点をその論文の導入部に用いているが、決してその理論に安易に依拠するのではなく、独自にその仮説の検証を行っている。そして、本論文が対象とするこれら中国中世の詩人たちの創作の場が、いずれも首都（帝京）を離れ、当時政治的・経済的に第二、もしくは第三の地位にあった中規模都市（これを本論文では「陪都」と定義する）で展開されるという共通性を発見し、彼らが時間と空間を超え、「陪都」という環境のもとで文学史的につながりを持つことを主張する。このことは、従来の例えば「陶淵明と白居易」という二大詩人の文学史的つながりを考察する際に全く考慮されていなかった新しい指摘である。陶淵明の尋陽（江西省）での自適の生活が、何故、孟郊や白居易の洛陽（河南省）での閑居の作品に投影されるのかは、本論文において初めて理論的に解明された。そして、北宋時代になり、司馬光の洛陽での自邸が、白居易の洛陽生活を敬慕し、その詩歌を出典として「独樂園」と名付けられたことも、本論文が初めて明らかにし得た事項に属する。従来、歴史書『資治通鑑』の編纂者であるとの紹介に終始していた司馬光を、はじめて文学者（詩人）として評価し分析したことは、本論文の大きな功績の一つである。

ところで、本論文において一層明らかになったのは、中国文学と政治との緊密な関係である。「陪都」での創作活動とは、言わばその詩人の左遷や失職（流浪）の結果でもある。本論文が提出した「中国の詩人がいづくトポフィリア」とは、その根底に詩人の貶謫と望郷（もしくは望京）の気持ちが存在する故にこそ発揮されるものでもある。今後は、このような「陪都の文学」が、宋代以降の中国、すなわち明清時代の南京や蘇州、また近代の上海などにどのようにつながってゆくのが課題となるであろう。また、そもそも洛陽という土地が、中国において、他の歴史上の都市と同質のものであるのかも更なる検証の必要がある。古代周王朝以来の由緒ある「古都」洛陽は、それ故にこそ「トポフィリア」的感情が生成され易かったとも言える。その意味でも、本論文が提出した視点は、今後の中国文学研究においても、重要な突破口として更なる発展が期待されるものである。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しい十分な能力を持つものであることを認める。